

さかくら・しんべえ 1949年生まれ。東京藝術大学彫刻科卒業、同大学院陶芸専攻修了。1978年十五代坂倉新兵衛を襲名。1989年山口県芸術文化振興奨励賞受賞。2000年パリ萩焼四百年展に出品。2004年山口県選奨受賞。2013年県指定無形文化財認定。

Information

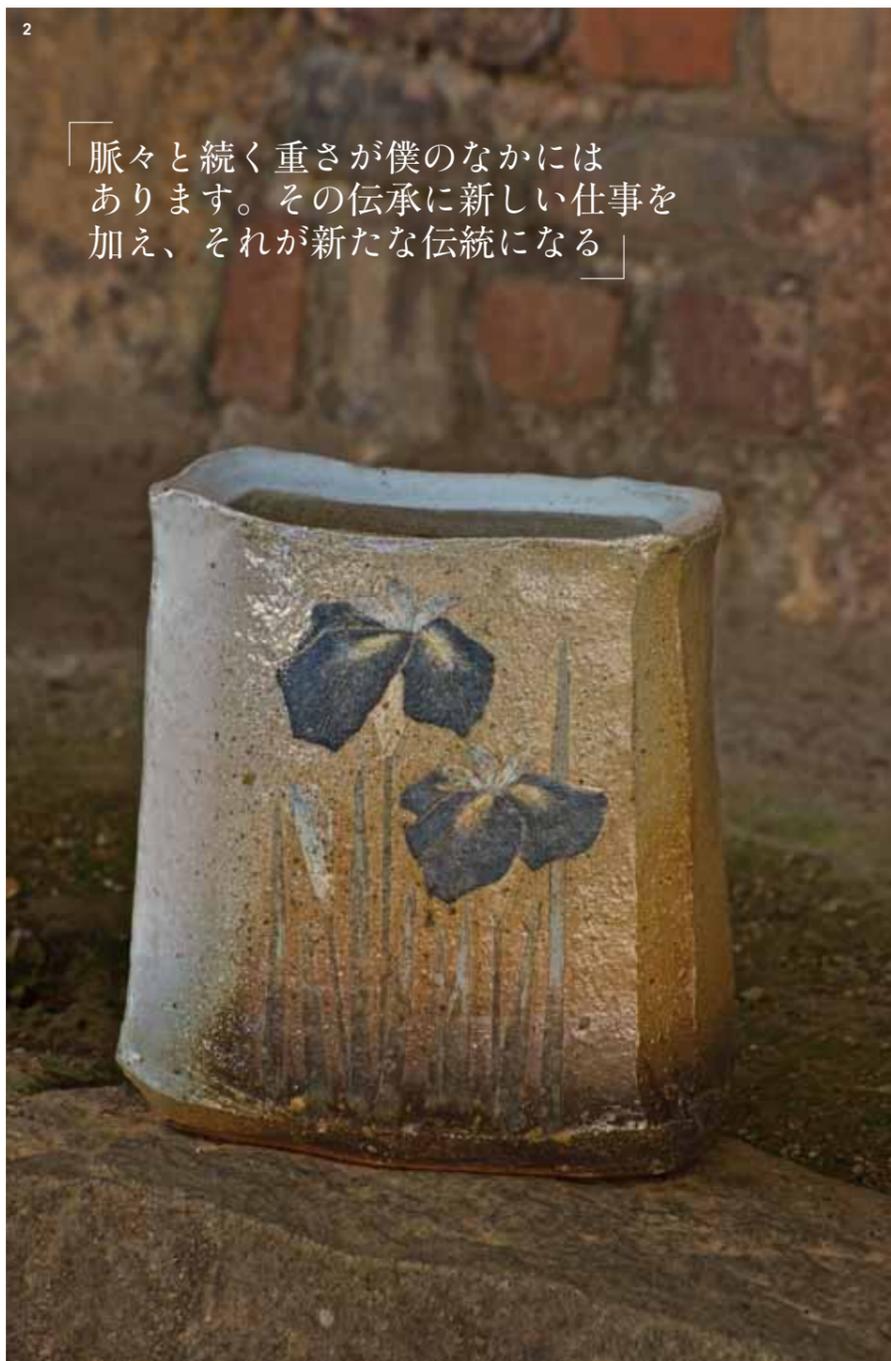
高島屋美術部創設110年記念
十五代 坂倉新兵衛作陶展

京都店 6階美術画廊
12月6日(水)→12日(火)
※最終日は午後4時閉場



1. 白釉を大胆にかけた、凛とした佇まいの作品。白釉茶盃(13.0×12.0×高さ8.5cm)
2. 油絵用のペインティングナイフで絵付けした華麗な作品。灰被花器 菖蒲(21.0×12.5×高さ23.5cm) 3. 伝統の大きな登り窯を使って今も焼く。

脈々と続く重さが僕のなかにはあります。その伝承に新しい仕事を加え、それが新たな伝統になる



Artist
Clip



十五代
坂倉新兵衛

Shinbe Sakakura

土と火と釉薬が 創る奇蹟

photo: Yasukuni Iida
text: Hideko Oiwake

萩

焼は、毛利輝元が朝鮮李朝の陶工二人を招致したことに始まる。十五代坂倉新兵衛さんはその流れを汲む。三代が現在の地、深川三之瀬に移り、藩の御用窯として栄えた。明治になり、十二代は萩焼を全国に広めた萩焼・中興の祖といわれたが、その孫にあたる。東京藝術大学彫刻科で学んだのち、家業を継いだ。正統派萩焼の伝統を継承する一方、様々な新しい試みにとりくんでいる。

「脈々と続いている重さが僕の中にはあります。その伝承に新しい仕事を加え、それが新たな伝統になると思っています」

長門湯本の山深い斜面に工房はある。十二代が作った巨大な登り窯でいまも作品を作る。そして何よりこだわるのは、土である。

萩焼は、地元で採れる「大道土」と「金峯土」、鉄分の多い「見島土」を混ぜるが、十五代は原土から1年かけて「土」を作る。即ち、砂の多い「大道土」を水濾過し土と砂に分け、土を1年間バクテリア

などで発酵させる。さらに砂を粒の大きさを4段階に分け、作品によって、この砂を土に混ぜる。このような土へのこだわりが、作品すべてに投影されている。

萩焼には、絵付けはほとんど見られないが、十五代は20年前から絵付けした作品も作る。油絵用のペインティングナイフで作品に絵付けし釉薬をかけて登り窯で焼く。土の色、釉薬、登り窯特有の灰被りが不思議な味を表現する。

「絵を見てももらいたいというより、絵付けすることで醸し出される全体の雰囲気、背景の土との対比、絵と土と釉薬が織りなす魅力を表したいからです。絵のない茶碗でも、土の美しさや魅力をどう引き出せるかを一番に考えています」

萩焼特有の微妙な色合いの魅力。白釉を大胆にかけるモダンな印象の作品も多い。十五代の作品を見てみると、陶芸の魅力とは、土と火と釉薬が創り出す奇蹟なのだと思ってしまう。陶芸家とは、妥協せずその魅力を追求する人なのだと思ってしまう。